
神話のDevilment

Grim Reaper

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神話のDevilment

【Nコード】

N6096Z

【作者名】

Grim Reaper

【あらすじ】

ある日、黒いコートの青年と少女がイギリス本土を闊歩していた。それが、イギリス……いや、世界を巻き込んだ事件の初奏だと知らずに……。それは神の悪戯なのか。果ては悪魔そのものなのか。

- S c e n e 1 - 尖塔

ぐるる。

朝から機嫌が悪い天が、一層険しい顔つきで唸った。

黒いコートを着た青年はその様子を遥か遠くに感じながらも、祈り続けた。

「本当に神などいるのでしょうか……」

かたわらの少女が不安げに空を仰いだ。

すると青年はすつと立ち上がり、少女の頭に手を置いた。

「皮肉だな……神によって生かされているのに……」

青年は無表情で憐れみの言葉をかけたが、しかし少女は首を横に振るだけだった。

「私は……悪魔によって生かされています……」

頭を垂れる少女の首筋に、掘り込まれた紋章が見え隠れした。

「……ふわぁっ！」

男のしなやかな指が、少女の卵がごとく柔肌を伝い、少女の体液をぬぐう。

「我慢しなくていいよ？声をあげても……」

「だ、だいじょうぶです……。お願いします……」

少女は頬を上気させ、消え入る声で懇願した。

「……いくよ」

「……んっ！あ……」

そして男は、少女が差し出した優美な脚を持ち上げ、少女の最も敏感な所に口を、つけた。

そして少女は大人になった。

「……………」

酷く冷え切った視線が、青年と少年にぶつけられる。

「どこか問題であるか？」

青年は少女の頭を一度撫で、視線を逆流する。

「あなたの行動全てですよっ！」

この歩く猥褻物っ！と続く甲高い声に、背に哀愁を漂わせる。

「言ってませんし、漂っていません！哀愁なんて！それよりツツ

コムベきなのは最後ですよ！なんですか、大人って！」

「一皮むけたじゃないか」

「確かにねっ！」

「それにしてもチビル……無事に宿に辿りつけそうだ」

チビルと呼ばれた少女はハッと目を輝かせた。

久しぶりに室内で寝れるかもしれないのだ。

「チビルじゃなくてツビルです！……でも、それって、あの女の子から？なるほど……」

ああ。と青年は頷いた。

「野宿はもう散々だから、話はつけておいた。それがどこであろうと文句は言えまい」

ツビルは深刻な顔で深く頷いた。

青年は路上に転がっていた杖を拾い上げた。それは遠目で見ても異彩を放っている。材質は金属でもなければ木材でもない。

「その前にチャペルに寄りたいが……いいか？」

「はあ、相変わらずの偶像崇拜ですね」

「違う。前にこの街に訪れた際、知り合った司祭に少し確認したいことがある」

端的に呟き、青年はカツカツと歩き出した。

よつと少女を軽々抱きかかえ、ツビルに目で合図する。着いて来い。

薄弱とした光がチャペルの尖塔の鐘を輝かせる。

やはり寒いが、その様子は温かさを分散させているようである。

「なんか、不思議な雰囲気醸し出していますね」

「ああ。俺は初めてじゃないが、その感情は抱いている。名は無いが、いいところであるのは確かだな」

中はとても神秘的な光が、ステンドグラスから降り注いでいた。その延長線上には教壇がひっそりと立っている。

と、教壇のすぐ隣のドアが音もなく開いた。出てきたのは、約六十前後の男性だった。

「おお、子爵！何年ぶりじゃい！」

「タナトスカムーンガルドで結構です。司祭様」

青年は横のツビルを指した。

「こいつは旭川ツビル。東方から来ました」

「ほうほう。東方とな……またこれは珍しい。ふむ、しかし土産話を聞いている暇はないようだ」

司祭はちらつとタナトスを盗み見た。

その様子にタナトスは苦笑した。

「本題ですが、なにか分かりましたか？」

「いや……どう思考してみても、祈ってみても神託は聞こえない。

子爵がココにいるのはやはりなにか役目があるといえる。すまんな、何も進歩はなくて」

司祭は頭を下げかけたが、タナトスは手で制した。

「謝るのは俺の方です。時間をとらせてしまつてすみません」

「ほっほお！老後の良い楽しみじゃよ。……もう行くのか」

子爵は座らせておいた少女の手をとり、ツビルに目を向けた。

「ああ、やらなくてはならないことがあるからな。またきます」

芯から冷やそうとする風が顔に吹き付ける。近くにある建物にぶつかって、またこちらに標準をかえて襲い掛かった来る。

掌に、小刻みに震える小さな手。段々体温を失っていく。

「大丈夫か？ 先ほども言ったが我慢はするな」

少女は上目遣いに子爵を見つめ、愛らしく頷いた。

「しかし、何故この馬車。高いわりに防風対策は出来てないんですよか……」

「文句は言ってられまい。乗せてくれるだけありがたいさ」

そういうタナトスの目は、遙か遠くの異郷を見つめているようだった。

虚空に放たれたため息は、ただ白く天に昇るだけであつた。

- Scene 2 - 素質

「膝……大丈夫か？」

子爵は横の少女の膝に視線を向ける。

その一部分は少し剥げ、赤みを帯びており、生々しいものを感じさせる。

「だ、大丈夫です！お気遣いなく……」

うう……と頬を赤らめる少女を、ツビルは面白くなさそうに見つめた。

そこに激しい寒風が吹き荒んだ。

木の葉を散らしながらのその様子は、どこか寂しさを連想させた。

「どうした、ツビル。ホームシックか？今更」

おどけたような口調で子爵は言ったが、ツビルは苦々しげに笑う。

「いいえ。……なんもないですよーだ……」

それから口を尖らせてぶつぶつツビルは言い出した。が、子爵は慣れたもので、手際よくツビルを抱きかかえた。

「な、なにするんですかぁ！は、離して下さい！変態！」

「気障なことは似合わないのは承知だが、そんな顔されたのを黙って見過ごすわけにはいかない」

そついいながら、子爵はツビルの髪をすいた。その行動にしばらくポカンと口をあけていたツビルだったが、我に返りパクパクと口を開け閉めし、また気が遠くなつていくのが分かった。

ひとまずは安心していいだろう。

すると、少女が身を寄せ、

「あの……子爵様とあの人はどういう関係ですか……？」

そして上目遣いでこう告げたのだった。

それがなにを表すか、子爵にはすぐ分かった。

「関係？決まっている。主従関係だ」

言い放つてから、横たわるツビルの頭に手を置いた。

少女は安心した、また怪訝そうな顔が入り混じった表情で、馬車から流れる景色を見つめた。

道は舗装された滑らかな道から、いきなり荒れた道に入った。カラカラと音を立てて馬車が勢いよく揺さぶられる。辺りは枯れ木を中心のこげ茶色に染まっていた。

「ここから人の気配が無くなった」

「これから紹介する人の土地ですから……この辺り全域」

子爵はハッと後方を振り返る。

広大な荒地は無限に広がっているように錯覚させる。地平線さえも見える。

「驚いた。主はこれほどまでの経済力を持っているのか」

「はい。彼は若くして伯爵号を得た天才ですから……。でも、この荒地には見覚えがありません。私の記憶が正しければ、草や花が咲き乱れたなんとも美しい原っぱだったと思いますが」

少女はアゴに手を当て、ううんと唸り始めた。どうやらその時のことを思い出しているようだ。

そして子爵もなにか引つかかったのだ。どこかで見たこと、聞いたことがあるような気がした。確か、何かの絵本だったと思う。確か、グリモワールに関する絵本だったはずだ……。本を詠むことで魔法が発動し、富が湧き上がってきたという。その一つに荒地を雄大な草原に変えるというものもあった。

「そういえばお前、名前は？」

思い立ったように子爵が問い掛ける。話の流れではこの問いはおかしいのだが、少女は気にせずはまだ唸り気味に答えた。

「アリス・バートン。アリスとお呼び下さい」

「主の名前は？」

「カロリス・バートンです」

淡々と質疑応答する二人を風が通り抜ける。

「……コレほどまでの土地は膨大な経済力を感じさせ、その名前……バートン。それらからは主を世界有数の高級菓子メーカーのバ―

トン社と関係があると推測できるが……果たして」

「合ってますよ。あ、ほらっ、あれです」

アリスが指差したのは、遠くからでも卓越した存在感を発する白い建物だった。

子爵が想像していたものと、ほぼ同じ造形だったが、決定的に違うものがあつた。それは、

「小さい、な。金にものを言わせて作らせた豪邸とばかり思ってたが……」

言い終わってアリスの表情を盗み見る。身内が卑下されたのだ。

しかし、アリスの顔は曇るところか、輝きを増していった。そしていきなり立ち上がった。

「そうなんです！そういう所が高く評価されていて、そこらへんの金だけは持っている腐れ貴族とはわけが違います！」

こちらが引く位の急変ぶりである。腐れ貴族とは……。

その空気を素早く察すると、彼女は引きつった笑顔を貼り付け、お淑やかに着席した。

無論、その場の硬直はとけることもなく、黄昏の光が、とても重いものとなったのだった。

- Scene 3 - 聖位置

神は人間に平等である。

そう思いだしたのは、つい最近である。

しかし少年はそれを認められなかった。今までの自らを貶めるようなことを出来なかったのだ。

「天才と平凡とを分けるのは知識欲の有無、か……。ふざけている」
ぼやき、読んでいた本を投げ捨てていた時だった。

数年前には飽きるほど聞いていた音が耳に飛び込んできた。

（馬車の音……野盗か？こんなところに？）

不安が少しと興味が半分。それは少年の冒険心を掻き立てるのに
は充分すぎるほどだった。

ティーカップを片付け、抜け道を通り、裏庭に出る。柵に立てかけておいた片手剣を携え、玄関口に周る。垣根に身を隠し、相手の動向を探る。

もし野盗だとしたら、あの「本」は何がなんでも持ち出させてはならない。しかし、少年を今蝕んでいるのは、そんな堅苦しい問題ごとではなかった。ただ興奮。それだけだった。

しばらくすると天井も壁もない馬車が屋敷の前に止まったのだった。

「ここ、か……。ありがとう、御代はここに置いておくよ」

男の抑揚のない声だ。だが、野盗ではなさそうだ。後には二人の少女が続く。一人は見覚えのある顔で、もう一人は異国情緒を感じさせる顔立ち。確か、東方の造形だったはず。

もう一度、馬車が乾いた音をたてて戻っていくのを確認して、彼らは屋敷に近づいた。

少年はいえ、なんとも素早い動きで、家の中に戻ってきてい

た。彼らに偵察していたのだ、とは悟られなくなかったのだ。何故か、といわれれば分からないが。

トントントントン。

小刻みな音のすぐ後、ギギギと木製のドアが開いた。

「さあ、どうぞ。我が家だと思って」

開いた直前のことだった。子爵らの顔を見ずに、家主は呟いたのである。流石にこちらの怪訝そうな様子に気づいたらしい家主は即座に切り出した。

「ちよつとした呪術を使ったのですよ」

そういうと家主は束のカードを胸ポケットから取り出した。

「ランプ？ いや、タロットか……なるほど、面白い」

「流石、タロットを知ってらっしゃるとは……。しかし、どうしたものか、あなたを表すカードは、これなのですが……」

言つて、家主は束から一枚だけ抜き取り、シュツと子爵に投げ渡した。それをいとも簡単に指で挟んで受け取る子爵。カードに示されていたのは、「13」。絵などは一切なく、黒い背景の端に小さく13とだけ書かれていた。

「XIII……死神つてわけか……。なるほど、貴殿の呪術とやらは信頼が置けそうだ」

家主はニコリと笑っただけで、奥に引っ込んでしまった。

屋敷は特別豪華なわけではなく、一般家庭が大きくなったと思えばピッタリくる。

「入ってましようか」

アリスがそう言い出さなければ、彼らは何をすることなく立ち尽くしていただろう。

頷くと、広間に足を踏み入れた。キレイにワックスをかけられており、外景が映えている。

「変わってなければ、ここが客室なはずです……」

案内されたのは、他とは違う華やかさを持つ扉の部屋だった。中

も扉と同様のきめ細かく美しい細工を取り扱っている、繊細な部屋であつた。

「す、すごい……こんな修飾初めて見ました……。感動です……」
感無量とばかりに目を細めるツビルの目からツーツと、肌を濡らしながら雫が零れ落ちた。

「それが、その細工の本当の効果ですよ。ただの飾りではないんですよ」

そこはかとなくおどろおどろしい表情で家主……バートン氏は子爵を見据えた。しかしそう感じられたものの、バートン氏は至って何心無い表情だつた。

「行きたいところがあるのだが……いいかい？君も一緒に……明日にでも」

突如として、子爵はバートン氏に言い放つたのだ。

了承される確立は極めて低いと思われたが、バートン氏はあつさり、「いいですよ」と旅支度を始め出した。

「あ、そうそう！これは皆様に申し上げますが……」

客室で丁度腰がすわつたところ、バートン氏が様子見に来た。

「位置には人を動かす、微弱ながらに力があるのですよ。僕はそれを聖位置と呼んでいます」

何故、それを今ながらに言つのか。何故、それを口走つたのか。何を伝えたかつたのか。

不穏な空気が美しくも鬱気な部屋をどんよりと重く垂れ込ませた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6096z/>

神話のDevilment

2011年12月31日17時51分発行